

ら裏見の瀧へ廻はり、日光を経て、また大まわりして伊香保に歸つた。  
新緑の伊香保は、晴れさへすれば二人を外へ呼び出した。先に見たものも、復見に往つた。初

めての處も見舞ふた。榛名山彙の出丸ともいふべき水澤山に上れば、頂は馬の脊のやうに、東  
南の眺望は平野をかけて限りなく、西向けば一昨春其巔を夫妻が攀ぢた相馬が嶽、二つ嶽、鳥  
帽子岳、榛名富士など簇かり立たす榛名山塊のドツシリとした城橋へ、折りからの夕陽に峰と  
いふ峰、岨といふ岨は黄に燃へ、壑といふ壑、窪といふ窪は濃い紫を湛へ、眺むる夫妻に唯息  
を吞ましめるのであつた。「見晴らし」の緑の展望は、畫にも描けなかつた。七重の瀧の上流を  
溯つてゆくりなく到達した山ふところの別天地は、祖先が見失ふた埃田の面影の其一端を見出  
でたやうな喜であつた。遙に榛名湖の片影を望む山の上で、遠くから寄せて来る驟雨の音に魂  
までも撼かされ、ある時は沼尻川の末の深い大壑の底に下つて、崖上遙に夕日射す藤の花を仰  
ぎながら此壑を鑿つた手の凄じさをしみじみ味はふた。先にあまり氣をとめなかつた山の草木  
にも、眼をとめた。順次に山に咲く躑躅の各種、花は小さいが山海棠、山芍薬、敦盛草は辨慶  
草の花に紛らはしく、瘠骨峠によく咲いて居た猩々袴は、後年日本ヒアシンスと私に命名した

もので、桐の葉めいた大きな二つの葉の中に小さく咲く山澤瀉の花は、若い番頭に「ガイロッ  
パ」と聞いて、羅旬名かと思ふたら、「蛙葉」である事を後で一茶の「おらが春」で知つた。慈  
悲心鳥の鳴く音にも、初めて耳をとめた。近くの湯宿に心中があつた。幼馴染の初戀の中で、  
事情の爲に男は娶り、女は嫁ぎ、共に子女數人の父母であつたが、世の中面白くなく、昔の思  
出に復つて、到頭心中をしたのであつた。劇薬で死に切れず、短刀で二人は命脈を斷つた。女  
の夫が妻を趁ふて來て、斯様な事になる程なら仕様もあつた、と嘆いたといふ事である。暮れ  
方、熊次が駒子と湯中子の方へ散歩して近頃植ゑた櫻並木の坂を上ると、八九人、提灯ともし  
て淋しい行列が下りて來るにはたと行き會ふた。頭うなだれてあるく若い男は、夫であらう。  
駕籠の中は、女の死體にきまつて居る。熊次夫妻は永いこと其處に立ちどまつて、提灯の火の  
下へ下へと細つて行くを見送つた。其時背後の山の方から今死骸の下り行く谷へ「慈、悲、し  
い——ん」「じ、ひ、しい——ん」と二聲鳴いて過ぎた叫聲を、二人は忘るる事が出來ぬ。  
思ふ存分山の氣を吸ふて、熊次駒子が伊香保の山を下りたのは、妻は色づき、田植近い田の畔  
に茨の花の白くこぼるる六月初であつた。

返子に歸れば、櫻山山腹の青萱の間に點々星の如く山百合がやがて咲き出し、すつすつと二條三條の白をあしらつたすつきりとした淺葱富士、相模の海をわたる風ももう夏であつた。伊香保で御結婚の日に會ひ、日光で新婚御旅行の日に會ふた熊次駒子は、返子に歸つて程なく兩殿下を近々と拜する機會をもつた。葉山から還啓のうち開いた御馬車が老龍庵の門口近く來た時、陸軍將校服を召された殿下は、左手に御劍の櫛をつき、白い手袋の右の御手を山手の方へ振つて、

「Iの別荘が其處にある。」

と仰すると、水色のバラソル、白の洋服、伏目の妃殿下がちらと其方を御覽になつた。夫の御君二十二に妃殿下御十七、好い御似合ひの若御夫婦である。

## 第十九章 夏 (四たび)

一

また夏が來た。

明治三十三年の返子は、もう熊次駒子が都落ちして來た四年前の返子ではなかつた。鳴鶴ヶ崎の埋立が出來、其處はまだ草だらけであつたが、別荘は山手にも濱手にも續々出來た。濱手には、村會議員を抱き込んで、勝手に濱に埒を結び籬を設けてわがものにする別荘なども出來、夏になると以前無かつた葎園の脱衣小屋などがいくつも列んで、濱が狭くなつた。あらめ屋が貸家を新築すれば、甘酒屋でも二階屋を建て、饅頭屋も狭い地面に其家を建直して二階を貸間に宛てた。あらめ屋の西隣、眺望こそよければ家同然の車夫の久さんの家は、八疊が唯一室で夏の内は月二十圓と威張つて居る。熊次夫婦に父母が欲しがつた〇別荘は、宮内省のさ

る大官が買った。其處の月影と虫の音を熊次駒子が殊に愛でた新宿寄りの砂地の松原も、追々  
區切られて、何某所有地の杭などが立つた。要するに返子ももう以前の返子ではなかつた。  
例年の通り、京都東京から深水の一統が来た。去年の詫心に、熊次が早く肝煎つたので、上州  
から岩原一家も隠宅に程遠からぬ民家に来た。明笛を吹く色黒の若者は、岩原さんの親戚に當  
る、昔兄の家塾に居た事もある岡田さんであつた。母が時折一弦琴を弾くので、ある夕岩原の  
お君が明笛を取りに往つて、隠宅で合奏が始まつたが、調子がよく合はなかつた。年月の進み  
は、夏毎に集まる子供の成長に見られた。兄の洋行歸りの第一番に生れた父の所謂小千代のお  
千代が神経質な三歳兒で、其後がもう義姉の腹に居る。深水の十番目の訥雄は六歳、みやげの  
所望を問はれて、「鐵砲でもええ」と言ひ、「叔父さんはむちややさかい。」と京都言葉でゆつく  
りと抗議を言ふた。熊次夫妻が返子に越した年の暮に結婚した太郎君おいささんの惣領娘一子  
がもうあらめ屋、甘酒屋の子供にまじつて、危あやまかしい足つきをしながら、兩手をあげて「やあ」と  
と街道を走れば、二番目は其母の膝に居る。何時何時までも二人の熊次夫婦は、夏になるとし  
みじみ淋しかつた。

あらめ屋の隣室には、東京に往つたり、來たり、山野のお爺さんがまだ居た。お婆さんも上方  
から來た。お婆さんも良いお婆さんであつた。駒子があはれな話を所望すると、お婆さんは直  
ぐN子の話を持ち出した。「忠ちゆうさんがナ」と息はづませて末子の腕白ぶりをお爺さんに報告に及  
んで居た。お婆さんがやがて東京に往くと、其忠さんが來た。Old boy より川端の堅次さん  
に肖て、二十四五の淺黒いきりつとした若者である。「職人で」とお爺さんは晒つて居た。銃獵  
好きで、好い犬を飼つて居るさうな。夜はシイツを敷いた蒲團に犬を寢かして枕屏風を立てて  
やり、留守にする場合は、月五圓の食料つけて犬を預けた。熊次は最初お爺さんの手から不如  
歸を幸野夫人に贈つた。夫人はあれから一度お蝶さんに書かせて禮狀をよこしたきり、決して  
あらめ屋に顔を見せなかつた。然し幸野夫人の話から生れた不如歸を夫人に贈らすには、熊次  
の氣が濟まなかつた。忠さんが不如歸の噂をした。幸野では、お蝶さんが先づ獨で讀んだ。借、  
誰が書いたのだらう？ と云ふ評議になつた。書には蘆花生著とあつて、肥後とも熊次とも書  
いてない。然し結局やはり「肥後さんだろぞい。」といふ事になつたさう。まことに面白ふござ  
いました、と忠さんは曰ふた。やがて忠さんは東京から來た川端の兩少年と、ゴカイを掘つて

は富士見橋の上から水の澄んだ頃を見すまして一尺もあるハゼの見釣りをやったりした。忠さんが去ると、兩少年は近頃凝つて居る寫真道樂に海を忘れて騒ぎ廻はつた。貞雄、熊彦、深水の谷雄などもそれに釣られて、夢中になつて小型の寫真機を追っかけ廻はした。川端少年達は熊次の室に来ては貝棚を撮つたり、「千秋積雪放祥光」の幅を背にして熊次を撮つたり、お芳を抱いた駒子を撮つたりした。修整を知らぬ少年技師の遠近濃淡の調節こそ出来ね、寫真はやはり正直である。兄の親子と熊次があらめ屋の裏縁で撮つた寫真に、女の如く足を揃へて兄の傍にくま竦む弟の姿を、後々までも熊次は笑止がつて、ある時頭わが足を削かつてしまつた。

鴨志田室には、男の子連れの丸髷の人が居た。すつと以前あらめ屋に夫婦で來た事もある人で、結婚後七年子供がなかつたが、あらめ屋に來て初めて今の子が出來たといふ事であつた。幸野の僕さんより未だ二つも年下の其子は、父を戀ふてか、

「お家歸らうよ、お家歸らう！」

と日に百遍も駄々を捏ねた。

一一

隣の清國に、義和團の攘夷騒ぎが起つた。熊次駒子が未だ伊香保に居る頃であつた。荒れ狂ふ團匪に北京の各公使館が包圍され、自衛を餘儀なくされた外國の男女は一つに縮まつて、日本の公使館附武官S中佐の指揮の下に、男は留學の博士までが皆銃をとつた。自利第一の支那人氣質で、戦闘の閉には巖壁下まで窈と往つて外人方に彈藥を賣つたりする話など傳はつて、深水さんなども笑つたものである。軍艦派遣、陸戦隊上陸、引つづいて更に北京の同胞救援の爲、列國何れも多少共出兵する事になつた。三國干渉に懲りた日本は、成るべく持重したが、英米の催促黙止し難く、一肩ぬぐ事になり、日清戦争の先例によつて廣嶋の師團が出て往つた。何かと云へば出しやばる癖の獨逸皇帝は、ワルデルセエ元帥を出して、聯合軍總大將の采配をふらせた。日本の新聞記者隊も續々繰り出され、K新聞から「政府と政黨」翻譯仲間OH君、M朝報からは不如歸を紹介してくれたS君などが出て往つて、水の悪い白河流域を大陸の

暑熱に弱り切つた行軍の状が追々に報道された。喧嘩はしても、まさかの時に、「血は水よりも濃」かつた。清帝から危局扶持を請ふ親電が、我至尊に致された頃は、聯合軍はもう浙江の潮の如く逆寄せに北京をさして寄せて居た。服装、言語、訓練、國さまさまの列國軍隊の列んだ中に、體格こそ小さけれ日本軍の水際立つた軍隊よりは、歐米人の眼を瞪らせずに措かなかつた。劣等視する異人種の心易さ、遠方の恥の掻き捨て、分捕に、亂暴に、思ふさま獸性を發揮した白人軍隊の舉動をぢいと横眼に見つつ、親類筋の日本軍は、流石に近い縁者の支那をいたはる事を忘れなかつた。

隣國の難を語り草にして、逗子の夏は賑合ふた。日日の新聞報道の外に、直だよりもあつた。軍艦須磨の陸戦隊を帥ゐて天津の防備に苦戦した海軍少尉の幸田君も、水兵を帥ゐて凱旋して来て、老龍庵にぼつりぼつり軍物語をした。幸田の一夫君は、津森伯父の長女が嫁した郷國玉名の幸田の長兄の嫡子である。江田嶋を卒へて初めて逗子に來た時、折りからの俄雨に家内大騒ぎして戸をしむる中に、ぢつと座わつて動かなかつた少尉候補生の落ちつきぶりを、そそっかしやの父が感じ入つて「あれは見込ぢやわい。」と熊次にほめたものだ。然し熊次は遠洋航海

の餞別に「青山白雲」を贈つたお禮を、次の會面にも一向幸田君が云はぬので、催促して禮を言はした不快が頭にあつた。天津でも、水兵が庇つて、危い處には決して少尉を出さなかつたさうな。幸田君は七十人引連れて歸つて來た。「七十人の中には、どうし、もやすか者ばかりや居らん。」と父はますます少尉をほめた。

騒々しい周圍の中に、熊次は飛びはなれて一の仕事を始めて居た。彼は逗子に來て以來の小品を集めて袖珍の小冊をつくる事を企てた。それはすでに新聞に一度のせたものもあつたが、新に披露するものも少なくなかつた。一昨年の事である、出京の歸途、蒲田の梅見に行く丸田、桐谷諸君と大森まで同車した。「富士の曙」の話から、丸田君は熊次に鴨志田君が斯う云ふて居たと噂した。それは、自然の日記を書いたら面白からう、といふのであつた。成程と熊次は思ふた。而して直ぐ實行にかかつた。去年は元日から大晦日まで一日も缺かさず日毎日毎の自然の見聞を書いた。熊次は從來すべてを毛筆で書いたが、自然の日記は初めて洋紙のノオトにペンで書いた。時には文中にペン畫を交へた。新しい編纂の冊子には、其中から抜くものが多かつた。兄に相談すると、至極賛成で、そんなものなら成る可く早く夏中にといふ事で、熊次は

大肌ぬき全速力で原稿を整理し、片端から社に送つた。巻頭には「灰燼」を入れた。巻尾には「風景畫家コロオ」を入れた。中間小品の或ものは、氷川町時代の書き捨てを蘇らしたのもあつたが、概して返子の産物であつた。「寫生帖」の表題裏には、オリイヴ、シュライネル女史の「夢」の一章を節譯した。熊次は返子に來てから、折々横濱に書買ひに往つた。谷戸阪の十字屋は、外人の旅客や、船員や、移轉歸國などする外人の讀み捨ての出物を澤山蓄へて居るので、薄暗い雜然と列べた書棚を漁ると、思ひがけない掘り出しものがある。熊次は此六月に其處でオリイヴ、シュライネルの「夢」を七十五錢で買つた。「A story of an African farm.」といふ小説の作者で、南阿弗利加に其人ありと知られた O.S. の名は聞いて居た。其短篇 "A woman's rose." を家庭雜誌に譯した事もあつた。「夢」は日輪を大きく上に、日時計を下に配した表紙の意匠も心憎いに、

私達には、眼に見えて、未だ手觸るる事の出來ぬもの

の幾分を生前しかと握れさうな

小さな女兒へ

の献詞もますます心憎いものであつた。内容はさまざまの夢が書いてある。烈々と照る南阿の白日の下に、ばつちり眼をあいに見るたぐひの夢である。はつきりと觀てしつかと感ずる、明るい頭、強い心の、醒めた婦人が女性の將來、社會の未來、いろいろについての冥想の結晶した散文詩であつた。讀めば面白いので、駒子をはじめ、岩原のお君、深水のお睦、實子や奈那子にも口譯して聞かせた。皆面白がつて、後では深水の姉までが聞きに來た。心血を注いで書くといふ「畫家の秘訣」は、其中の一章であつた。扉の裏には、

「そは我れ自然を觀る事を習ひぬ、

考無き年少當時のやうにはあらで、

幾度か靜かに哀しき人類の音楽を聞き——」

といふラルヅラルスの句を題した。題名を何とするか、熊次は一寸困つた。兄に「天然と人」がある。あまりに露骨な踏襲ではあるが、右に自然左に人生の歌を聞く熊次に、やはり「自然と人生」は落ちつく最後であつた。不如歸に懲りて、表紙には明白に著者の實名を出した。表紙には、夕月に大きい白帆と青蘆を淡彩で自ら描いた。それは相模の海より利根の回想であつ

た。裏書は伊香保の山の草薙娘を描いたが、それは似而非なるものに描き變へられた。原稿整理も、校正も、すべては楽しい道楽仕事であつた。表に垂れた簾の外を白い衣のぞろぞろと皆が遊びくらす夏の盛りを、熊次は卓に向ふて忙しく過した。駒子も籠りきりに過した。忙しげな勉強ぶりを、簾のはづれから覗いて、客は大抵遠慮したので、熊次はあたりの騒々しい中に案外氣樂な夏を過した。而して八月中旬には、涼しい装をした可愛げな「自然と人生」が熊次の手中にあつた。手にする熊次はうれしかつた。彼は見かへしに斯く書いた。

四年の間、

日夕吾を慰め、

吾を誨へ、

吾汚を洗ひ、

吾を復活せしめたる

富嶽と湘海とに

此小冊子を捧ぐ。

「自然と人生」が世に出る頃、隣邦支那では、聯合軍が北京を攻落し、清帝、西太后は西安に蒙塵された。其號外を語り草にして、夏も闌の海邊はますます雑沓を加へた。在任四年の今迄にない盛な祭禮もあつて、葉山のハイカラ乳屋が女装して行列に出ては祭禮が一日でつまらぬと嘆いたり、六代様下の田甫に舞臺が出来、山崎街道の與市兵衛が型の通りの仕草から直ぐたき立てる鉦の囃子につれての館屋踊になつて盛に汗を流せば、熊次の隣で立見の山野のお爺さんは、肥柄杓でもふり廻はすやうなお輕の手ぶりに舌鼓うつて、これはたまらぬと逃げてしまつた。村では字字の間に事のもつれから喧嘩を仕出かし、無抵抗の太兵衛さんは、埋立の石垣から海へ突落された。暑い時だし、怪俄はなかつたが、思ひがけない海水浴を着のみ着のままさせられた太兵衛さんよりおかみが腹を立てた。

先にも遊びに來た素木のみどりさんが、天野のお増さんと山手の小さなはなれを借りて居た。

北海道生れの素木さんは、女子學院に平生は住んで、自分の好きに出あるいた。阿父が好きな秋刀魚を東京から取り寄すれば、女のみどりさんも蝦食ひ専門に江の嶋に往つたりもした。お増さんの父者は、耶蘇教界の香宿の一人で、歌學が出来、讚美歌なども其手に成つたものが多かつた。説教の草稿に、「此處にて泣くべし。」と注意のしるしをして居た、などと笑話に聞いたものである。其女で青山女學院の教師をして居るお増さんは、日蔭の花のやうに白くて見る眼弱々しげに、父に肖てよく歌を詠んだ。來たはじめの夕、飯の菜に卵一つしか獲られなかつたので、「あはれなり卵一つを菜にして仲よく食べる云云」と詠んだものだ。熊次夫婦が招かれて行くと、素木さんは風月堂から取り寄せたアルファベットのビスケットを出し、「Welcome」と疊にならべたり、トマトを出したりした。其後二度目で熊次夫妻が太郎君夫妻と打連れて二人の宿を訪ふと、暗夜の道わるに、近眼の熊次、氣をつけてお上げなさい、とおいさんのさし出に、餘計な事をと駒子は腹を立てた。

富士見橋の北詰、川に臨んだ養神亭のはなれは、九年前肥後一家が逗子に來初めの宿で、お茶の水の三年生菊池駒子が初めて肥後家族の中に十日置いてもらつたも其はなれであつた。此處



に突然藤原君夫妻が住み込んだ。藤原君は郷國八代の出で、熊本では兄の家塾に居た。藤原君の兄者の太田君は、乳齒愛らしいやさ男、今東京で辯護士界に相當識られた榎本といふ友達との指輪を争ふて、取りつ取られつ何時までも出發の埒が明かぬで困つた、と同行の一人がこぼしぬいたものである。其弟の藤原君を、熊次は熊本では知らなかつた。清人君と同じく東京高商生で、同じ退學仲間であつた。清人君が新聞記者生活に入ると、藤原君は實業界に入つた。熊次も株を譲られて今其小さな株主の一人である三池紡績に入つて、其處の親分株の大牟田さんに引き立てられ、忽ちの間に大阪支店長に拔擢された。三井の大番頭Mさんが一見才氣に惚れ込み、三井へ引張りにかかつた。藤原君は昔の師、熊次の兄に相談したものである。感心な事です。と兄が父に曰ふた。大牟田の下に居残りを勧められて、藤原君は三井入りを見合はした。然し氣鋭の若い支店長に、大阪は誘惑であつた。金が自由になるままに、藤原君は相場に手を出した。頻に關係の人人を御馳走したりして、すべては有望に見えたが、九分九厘のところ、賽は反對の方へ轉げた。大穴をあけた支店長は、しばらく行衛不明になつた。北海道くんだりまで往つたらしく、清人君に問ふたが、一向知らぬとしらを切つた、と兄が晒つて居

た。トド返りに落ちて来て、しばらくここに再起を待つ事となつたのである。藤原君は先一度細君を亡くした。氣も狂ふばかり嘆いた事を、熊次も耳にして居た。落ち目に伴ふ二度目の細君は、備後の素封家の出、名は太郎君の細君と同じおいささんであつた。眼のきよろりとした淺黒い、銀杏返しのそれ者らしい風をして、中國訛りの和らかい口を利いた。實家から來るみやげ物を持つてはよく隱宅に齎したり、熊次夫婦のあらめ屋に持つて來たり、貞雄熊彦にダアスの鉛筆をやつたり、お芳を借りて往つてあやしたりして居た。藤原夫妻には子供がなかつた。ばつと小さな八字髯、丈矮ゆがのでつぶり太つて血色の好い顔をして、小さな聲でぼつりぼつりものを言ふ藤原君は、打見た所一向情氣でも居なかつた。「寅一さんが、海水浴なんかせんがええ、身投と思はれる、てち言ひなはるから」と笑つて居た。藤原夫人に「御不自由でしやう。」と挨拶し得た熊次は、藤原君に何も言ふべき言がなかつた。熊次夫妻は太郎君夫妻と藤原君の住居を訪ふた。おいさ同志の名の符合から、太郎君夫妻は藤原夫妻に格別興味を感じるらしかつた。亡くなつた太郎君の先妻お袖さんが、やはり中國生れであつた。太郎君は逸早く特に藤原君のはなれから描くべき好い畫料を見つけ出したかのやうに、描きかけの油繪が其處

に置いてあつた。此二三日御無沙汰をして居るといふ太郎君の挨拶に、「此方は一向」と藤原君は低い聲で薄笑つた。太郎君のおいさんが藤原君に近々と座わると、藤原君はぶいと座を立つた。太郎君は黒い顔をいとど曇らして居た。平氣で居る、と藤原君同郷の先輩の社の久野さんは度胸に舌を捲いた。大勢に迷惑かけて酒蛙酒蛙して居る藤原君を、熊次は不快に思ふた。財産悉皆投げ出したといふに、假染の住居に光る大理石の置時計の見事さ。朱の總よさで紺緞子を結んだ琴の袋の美しさ。遊びに來た山下君などが無造作に借りて引つかける上布の單衣、色縮緬の兵兒帶、すべてが熊次にうれしくなかつた。藤原君があらめ屋に立寄つて、清人君の消息を駒子に問ふたりする。駒子の口數が過ぎる、と後で熊次は駒子を打つた。駒子はまた藤原のおいさんが中形の浴衣を幾枚となくつるして居るのを見かけて、「澤山のお召ですね。」といふと、「日に五回位は着更を致しますから。」と世にも無邪氣に言はれて、肝をつぶした。山下君は直ぐ歸つたが、山下の細君が入れ代りに少し藤原君のはなれに逗留して居た。兄が最初山下君の爲にお爲さんを探んだ時の可笑味を言ひ出でてからかつた。「家庭雜誌にお書き下さい。」が縁結びの最初であつた。山下の細君も不如歸の愛讀者の一人であつた。あらめ屋に來て駒子

の裁縫を手傳ひながら、お爲さんは曰ふた。

「不如歸は私皆暗誦して居ます。何處でも聞いて、御覽なさい。」

熊次が裁縫の手傳ひを氣の毒がると、

「一生懸命にしてるのぢやありませんから。」

とお爲さんはあつさり應へた。

熊次は藤原君の近づく事を喜ばなかつた。然し藤原のおいさんは、駒子によい話相手を見出して、熊次の留守にはよく長話をした。藤原君は書齋に先夫人の肖像を掛けて居たさうで、後入のつらさをおいさんはしみじみ駒子にかき口説いた。「高尚なお仕事で」と熊次の仕事を駒子にほめた。「ごころ寝てばかり居ます。」と藤原君の事をこぼした。熊次は此頃目立つて太つて居た。川向ふを通る熊次を眺めて、ああお太りになつて、御病氣ではあるまいかと心配致しまして、とおいさんはぼろぼろ涙を流した。何かにつけて涙脆くおいさんはなつて居た。おいさんがあまり熊次の事を言ふと、「熊次さんのやうに學者ぢやあるまいし。」と藤原君も苦くるさう。おいさんは駒子が少しも清人兄の事を知らぬに驚いた。何でも、北海道で、奥さ

んがおありで、男のお子も一人お出来になつて居るさうでございますよ、とおいさんは曰ふた。駒子は胸を轟かした。然しおいさんもそれ以上くはしい事は知つて居なかつた。

日曜毎に、葉山の方で耶蘇教のあつまりがある。其たび岩原さんがあらめ屋に寄つて駒子を誘つた。熊次は決して駒子をやらなかつた。「出れば直ぐ姦姪でもするやうに思ふ。」と岩原さんがぶつぶつ言ふた。極めて稀に外出の許可が熊次から出ると、岩原さんは眼を圓くして天變地異の如く驚いた。岩原さんは尾の道に多年流浪して居たので、尾の道から程遠からぬおいさんの實家の事は聞き知つて居た。中々の素封家、といふ事である。駒子を誘ふ岩原さんは、藤原のおいさんも導きたかつた。おいさんがあらめ屋の縁に腰かけて居る。岩原さんが、座敷から此方へと請じて、

「よろしあります。」

とお辭義して、おいさんは中々上らなかつた。

岩原さんの發意で、寫眞を撮らうと云ふ議が起つた。兄も岩原さんも深水の義兄も居ぬ隱宅の夕の集ひに、肝煎役の熊次は、兄を納得さすべく母からも一言を求めた。義姉はもう七月の腹

をかかへて居た。

母が顔をしかめた。

「寫眞を撮るなら、兄弟で相談するがよろ。」

熊次は悄氣た。

岩原の姉がしきりにはしやいで、自身の缺點を云々しつ、

「阿母さんがさう生みつけなかつたが悪い。」

と母に甘えるやうな事を言ふ。ぬけた間ふさぎに、熊次が冴えぬ一言を言ふと、

「さうですか。」

と姉はつんと鼻であしらふた。

熊次はますます悄氣た。

不如歸を讀んで、「叔父さん、千々岩は可哀想ですね。」と言ふた岩原の姪のお君が、すつと袂に花を摩つて芝生を下りた。三年前の夏も咲いて居た西洋風蝶草の花である。「亂暴な。」と姉がお君を窘めた。

「摩でてやつたんです。」

と女は其母にやり返へした。

母にやり返へし得ぬ熊次は、悄々あらめ屋に歸つた。

あくる日の聖書講義に、岩原さんがそれとなく母の没義道を警めた、と聞いて、片腹痛く熊次は思ふた。全くそれは母が正しかつた。弟が兄を憚り、相談事一つ臆劫がつて親を煩はすやうでは、同じ腹から二人を生んだ母にとつて、それが苦痛でなくて何であらう？ 岩原さんの同情は、見當が違つた。

八月十九日といふ日に、鎌倉から寫眞師が来て、肥後一族、岩原一家、深水一族、總勢二十六人、七十九歳の父と七十二歳の母を中心に、紀念の寫眞を撮つた。隱宅の庭が狭いので、深水の庭の議もあつたが、兄の一言で當然父母の住居で、ときまつて、里道一つ隔てた西隣の高臺の芝生を其場所に擇んだ。大きな腹をかかへた義姉も、其爲にわざわざ東京から来た。大勢の寫眞が濟むと、父母の寫眞を一枚、それから兄弟夫婦の寫眞を撮つた。それは碎けた一枚であるべく、熊次は羽織をとつて、浴衣の腕まくりして砂利の上に足投げ出し、兄は洋服を脱いで

荒綿の浴衣、海水帽を手に切株に腰をかけ、妻達は各自夫の傍に立つた。

「熊次さんな常陸山のやうだ。」

と出来て来た寫眞を見て、岩原さんが曰ふた。眼鏡をかけ、口髭を立て、白い單衣に黒の夏羽織をかさねた熊次の立姿は、深水の義兄に隣つて抜群の體格に見受けられた。三十で海邊に来て今三十三の此四年間、自然に浸つて熊次は健康の基礎を造つた。夏毎にきまつてする陽加答兒などは、忘れたやうになつた。二十代の瘠せぎすは、三十過ぎてめきめき太つた。外見は押しも押されもせぬ一人前の男である。然し熊次自身はわが面影の何處となく従兄又雄さんを思はずものがあるやうに思へてならなかつた。弱さ、幼なさが顔に出て居た。駒子はもう數への二十七であつた。然し子供が無い彼女は、彼女自身まだ子供供して居た。甘酒屋の二階を借りて、海軍將校の一家が避暑に来て居た。十八息子は耳が遠くて、これから洋畫をやるといふ青年であつた。太郎君が連れて來ると、熊次に向ひ、

「あなたはこれですか？」

と青年は鑿と鰻でたたく眞似をして見せた。彫刻家か、と謂ふのである。太郎君が其耳元に口

を寄せ、

「君は『ほととぎす』といふ小説を読んだらう。あれを書いた人だよ。」と怒鳴つた。其青年が熊次に曰ふた。

「あなたの奥さんは十七位ですか？」

駒子は年の十歳若く見られたのであつた。

「女中もなしに、始終お勝手をしてゐらつしやるのに、しなしなしてゐらつしやるわねえ。」と素木のみどりさんが天野のお増さんと駒子の噂をしたものである。

岩原さんは曰ふた。

「色色云ふたてちや、交際の中心は熊次さんでした。」

寫眞前に、姉達を請じて、熊次は座をはづしたが、あらめ屋に一夕の馳走をした事があつた。それから深水の宅でも、兄や熊次夫婦、岩原一同を午餐に招いた。兎に角それは熊次に珍らしい事であつた。岩原さんは、人遠い熊次に會て忠言の甲斐があつたやうに思ふらしかつた。然しうるさい事は、やはりうるさかつた。あまりうるさくなると、熊次は駒子と横濱に往つたり

した。居留地の大寒暖計が九十八度を指す日さかりに、擇りに擇つて支那料理に入ると、案内の女中が心得貌に二階の奥まつた別室に案内し、「此ちらは、お呼びになりませんと、誰も参りは致しませんから」とわざわざ注意をして下りて往つた。夫婦は顔を見合はせた。中禪寺の宿では、心中を懸念された。横濱ではまた逢曳と見當をつけられた。兎角に天下晴れぬ夫婦で熊次駒子はあつた。

人の出入りの多い夏は、畢竟熊次にうるさかつた。岩原さんがうるさがらせの親玉である事を、岩原さん自身は氣がつかぬらしかつた。ある午後、熊次が晝寝の最中に、岩原さんが來た。寤めたが、うるさいので寢たふりを熊次はして居た。岩原さんはずんずん上つて來て、熊次の寢て居る側で、駒子に小聲で話しかけた。熊次が寤めて居る事を知つて居る駒子は、硬くなつて相手をして居る。岩原さんは駒子に勸告をはじめた。

「飯ばかり炊いて居なすつちやア、惜しい事たい。」

「教員でもしちや如何です？」

「収入もふえやうし——」

「——」

「上州に來ちや如何です？ 熊次さんは書くし、ああなたの仕事は別にある。」

「——」

熊次の胸が早鐘を撞いた。痲癢がちりぢり起りかけた。厚皮しい男ではある。何が牧師なんだ？ 然し面倒嫌ひの彼は、起きて義兄を罵倒するより、狸寝入りを續けるの易きを選んだ。岩原さんは上州誘引を直ぐには詮めなかつた。ある夕、隱宅の縁に腰かけて居た岩原さんが、座敷の母に熊次夫婦の噂をして、半身縁に寝そべるやうにして座敷を覗き込みながら、

「熊次さんは、上州に來なすつたらちさうおみわさんとも言ふとることですが。」

と言ふた。また始めたな、と熊次は黙つて居た。

「東京に出にやならん體かただけん。」

と母が言下に打消した。

岩原さんは其後二度と口に出しては、上州に來い、を言はなかつた。

岩原さんは、高崎の會堂新築を企てて居た。上州行の埋合せかのやうに、新築會堂の庭木の代に、熊次は金十五圓を寄附した。やがて岩原一家を逗子驛に送る時、岩原の姉が待合室の席をはなれて、

「昨夜は存じがけない——」

と几帳面に熊次に寄附の禮を言ふた。其尾について、岩原さんも立つて來て、きまり悪さうに禮を言ふた。

\*

\*

\*

\*

瀛車の中でアルコールランプで乳を沸して子供に飲ませたり姉がすれば、睦子を相手に荷物しめなども深水さんが自らし、六歳兒の訥雄までが何かしら小さな手荷物を提げて行くやうに馴らされて居る京都の旅馴れた家族は、出水などで線路故障の無い内にと、大抵二十日前に引揚ぐるを例とし、今年も岩原家より早めに歸つて往つた。岩原一統、肥後の子供等、避暑客と云ふ都の男女、知るも知らぬも歸る者皆歸つて、四度目の逗子の夏は過ぎた。而してそれは熊次駒子に最後の逗子の夏であつた。

## 第二十章 新秋

一

来る何日の紙上より「風變りの長篇小説を掲載すべし」といふ豫告と共に、九月に入ると熊次は「おもひ出の記」を新聞に書きはじめた。自傳體小説で、「トルストイ」の場合と同じく彼は言文一致で書いた。碎けて、心易く、話をするやうに、と意味したのであつた。作家が世に認められて自信が裏書きされると、必自家を語る、といふ常例に漏れず、熊次は自己のあるものを語るべく「思出の記」を書いた。今春横濱で買つて來た書の中に、デッケンスの David Copperfield があつた。赤の Cloth 表紙、銅版畫入りの二冊物である。D.C. はデッケンスが自家の經歷を小説化したもので、子供の中でも此 D.C. は殊に愛兒と作者自身も言ふて居る。其中の主人公が第一の妻ドラとの世帯もちのくだりは、「雛嫁」と題して若松賤子がK誌に翻譯

した事もある。あらめ屋の籐の椅子で初めて D.C. に讀み耽けつた熊次は、笑つたり、涙ぐむんだり、而して自分も書かうといふ念を起さず居れぬ人であつた。而して彼は終に「思出の記」を書きはじめた。

「青山白雲」の序に、「願はくは心を虚しうし、赤子となりて、伏して造化の秘書の第一頁を披かん。」と彼は書いた。それは譌ではなかつた。然し彼は若かつた。彼は自然を直視しはじめた。然し人間を直視する事が未だ出来なかつた。彼は自己を凝視するに堪へなかつた。彼の三十三年の生涯には、醜い事、苦しい事があまりに多かつた。彼の周圍にもいやな事、淺猿しい事があまりに多かつた。彼には「生ひ立ちの記」を書いたトルストイの眞摯な謙遜と敬虔な勇氣がなかつた。英吉利風の行儀のよい D.C. の書きぶりがヨリ好い粉本であつた。苦痛には眼をつぶり、面倒には顔を背け、恐ろしい事、醜いものには始終迴避の態度をとる熊次に、突込んで三十三年の生涯の總勘定が出来やうはない。神の藝術を辿る視力も脚力も未だ彼には無かつた。「What it is」の描寫でなく、「What it ought to be」を小説家は書かねばならぬ、と二十二歳熊本で出京の許を待つ頃も彼は思ふて居た。其れがまだ彼にくつついて居た。今彼は

「思出の記」を書く。端的に自己を書くとするれば、書くに忍びぬ事だらけである。それを差引けば、いくらも書く事はない。そこで「思出の記」に於て、熊次は自己のあるものを游離させ、兄のあるものを取り入れ、人物事物さまざまの思出の上澄みを軽くすくひ上げて、氣輕に面白い讀み物を作つた。初卷の舞臺なども、熊次の故郷と駒子の故郷を入れ更へたが、あまりに現實に近いが憚られて、はつきりした固有名詞はないものにすべてがぼかさされた。菊池慎太郎は決して肥後熊次でなかつた。松村敏子は、必しも菊池駒子でなかつた。敏子の父は、駒子の父のすべてでなかつた。慎太郎の母は、熊次の母の肖像畫ではなかつた。出て来るすべての景も人も、著者の視聽の結果が多いは事實であつた。然し忠實な寫生は一もなかつた。要するに、それは「不如歸」と「自然と人生」を出して氣をよくして居る三十三にはずんと若い作家が、面白半分氣輕に書き流した空氣澤山の身の上話に過ぎなかつた。

然し少しでも自己を投入した自傳體小説である。書きはじめると、流石に興に乗つた。夏も過ぎ、新秋の爽やかな氣分で、熊次は現實に即かず離れず筆の輕業を日面白く續けた。父が裏の櫻山の見晴らしの好い處に小さな四阿を建てた。而して深水別莊の上、I公爵別莊の横手か

ら上る山路に、足がかりの横木の段々をつくらせた。片手に杖、片手に小形の木鋏と棕櫚繩を入れた網手提を提げて、山見廻りに往くたび父が休息の場處であつた。父が追々に植ゑつけた松苗、楠苗などがすんすん成長した。松の心芽がいたづらな兎に喰はれて、兎の糞がころろして居る事があつた。松を伐つたりした後の木の香が、何とも云へず好かつた。あらめ屋がさしてうるさくない時でも、熊次は筆硯紙墨を風呂敷包にして山の四阿に上つた。初秋の海のあなたには、まだ夏姿のままの富士が此方を見て居る。下には夏のひと盛りを過ぎた返子が、平日のいとなみをつづけて居る。喇叭を鳴らして葉山通ひの乗合馬車が通る。身近には百舌鳥が鳴く。そよ吹く風に、松が微吟の音を立てる。熊次は四阿の卓で心地よく「思出の記」を書いた。大分書いたと思ふ頃、麓の里に午鶏が鳴く。黒い髪、白い面が山を上つて来る。駒子が午餉を持つて來たのだ。山上りにほうつと赤くなつて「ああ、好い風！」と莞爾した妻を、夫も莞爾して迎へる。原稿が片よせられ、風呂敷包が開かれる。西洋皿に車飯のフライが現はれる。夫妻相對して山の上の午餉はうまかつた。終ると、また風呂敷包を提げて、駒子は下りて行く。一休みして、熊次はまた書きつづけた。



米國に行くといふて、伊倉の敦雄君がぶらりと逗子に來たのは、八月も末のある日であつた。熊次は隠宅にと母に言ふたが、母が聲尖らして勿ねつけた。父が敦雄君の祖父と合はなかつたやうに、母は伊倉の伯母を好かなかつた。熊次はまた敦雄君の父者人を好かなかつたが、先年熊本で熊次があゝの亂暴の後始末に克義さんを煩はしてから、熊次の感情は大分變つて居た。あの時、伊倉の伯母は女學校を追ひ出されかけて居た。熊次夫婦が東京へ歸ると間もなく、到頭伯母は女學校を出た。然し伯母を慕ふ女生の一團が伯母に跟いて學校を出て、別に家を借りて教授がつづけられた。闘もなくなくてはならぬ伯母は元の鞘に納まつて、依然女學校の舎監をして居た。熊次が氷川町でどん底を歩いて居た時、伊倉の伯母は熊本で女學校に一期の苦境を辿つて居た。先に伯母を追ひ出した男女校長の栗原さんが經營難にやり切れず、男校は到頭閉鎖して了ふた。伯母の一心で、女校は生き永らへた。男校の校額までも、女校に保存された。

熊次夫婦が逗子生活の四年間に、伯母も追々苦境を切り脱けて、新しい講堂などが出来るまでになつた。伯母の催促で、母や駒子が祝歌祝詞を送つたものである。然し其講堂新築を擔當した教師の一人が、酒色に耽つたりして、女學校は又もや苦境に陥つた。洋行を志して、札幌農學校の豫科から歸郷して居た孫の敦雄君が、英學校では先輩の一人であつた其教師を斷乎として黜けたのであつた。孫達の中で、嫡孫音彦君と三番目の敦雄君が祖父茶堂の愛孫であつた。次孫の地平君が生れた時、祖父は一見、「何だ、百姓面しとる、地平とでもつけろ。」と終に地平と命名した。敦雄君が急病でひきついたりすると、祖父は口も利けぬ程心配して、「先生は孫が四人もあるに、あままで心配せんでも」と塾生達に曰はしたものだ。地平君は弟を好かなかつた。「何て睫毛の長いやつだらう！」と睥睨した。熊次が京都を飛出して熊本に居た頃、敦雄君は十三であつた。夏の頃、鮎すくひに往つて、澤山とつて敦雄君が歸る。母者のお鐵さんが忙しがつて相手にならぬ。敦雄君が睫毛の長い眼を伏せて、「祖母さんが居んなはらんけん」としくしくこぼしたものだ。母者が濟まなかつたと云ひ顔に、急いで獲物の始末にかかつた。其後十年も會はなかつた間に、敦雄君は札幌の農學校豫科から今米國行を志して來た二十三の青年で

あつた。農は伊倉家の家業で、教育は祖父時代からの仕事であつた。祖父は西洋の物質文明を取り入れるに何の躊躇もない人であつた。祖父の心を嗣いで、嫡孫音彦君は渡米苦學したが、二十三で米國に客死した。五年目に弟の地平君も熊本で亡くなつた。三男で伊倉家の嗣子になつた敦雄君は、米國で亡くなつた兄の志を嗣いで、兄の亡くなつた其二十三の年に渡米を企てた。亞米利加に何をしに行くのか、と熊次の父が晒つた。「Yale に行くつて言つてゐなざるのに！」と岩原のお君が口惜がつた。岩原の姉は、伊倉の伯母に第二の母の恩愛をうけた人である。熊次も同様であつた。

母に振られて、熊次はあらめ屋に敦雄君を泊めた。それは可なりうるさい事であつた。餘計な焼餅をやく機會も、お蔭で出來た。然し敦雄君はびくともしなかつた。熊次夫婦が馬鹿文と名づけた鶏屋が來て、鶏を賣る。時には瘠せて肉なく臟物ばかり大きい鶏を賣つたりした。駒子が値段をつけて居ると、濡手拭を頭にのせて散歩から歸る敦雄君が「廉うござりますばい、熊本あたりぢや——」と無邪氣に鶏屋の肩をもつた。程なく熊本だよりは敦雄君の姉者のお和さんの死を報じた。敦雄君の出立當時餘程もう重態であつたが、病人の姉が勸めて弟を立たした

のであつた。お和さんは地平君の妹、敦雄君の姉である。熊次が幼少時代眼の養生に伊倉家に往つて居ると、年下のお和さんは氣弱の熊次に馬乗りになつて、熊次の菓子を取つたものだ。伊倉の伯母は此孫女を熊次の妻にと只管望んだが、母が頭を掉つて聽かなかつた。一寸歸らなくてもよいか、と熊次が敦雄君に注意した。電報をかけると、歸るに及ばぬ、との返電で、敦雄君は返子に泊つた。やがて横濱を立つ日が來た。熊次は梨一籃持つて、後から船に往つた。其多くは故國をはなれて布哇へ行く出稼の男女が雜沓する下等室に、新調の藍鼠の服に同じ鳥打帽子、長い睫毛を伏せて淋しく打案じ顔に敦雄君は佇んで居た。梨の籃を渡す間もなく、熊次は解に下り、船は亞米利加を指して出て往つた。様子を熊本に云ふてやると、伯母は喜んで、「兄のやうにしてくれて」と禮狀をよこした。熊次は決してわれながら好い兄とは思はなかつたが、兎に角すべてが無事に過ぎて、先づは一安堵したのであつた。

不如歸は追々版を重ねた。「自然と人生」も黒人評が好かつた。「繪畫の研究を詩觀に應用し、自然を白描す。」と丸田君は評し、「趣味滴る如き散文體抒情詩」と創刊時代にK新聞に居た事もあつた。Uさんはほめた。逍遙大人は、よくラスキンを讀んだ人、と言ひ、美文白露集を出した赤門

出の若い文學士の一人Aさんは、中の「相模灘の落日」を見て、所詮及びさうもない、と嘆じた。社の久野さんの弟で俳句など早くからやつて居るM君は、書きたい事が殆んど書き盡され居る、と曰ふた。然し不如歸をほめたうめ合はせかのやうに、日本新聞では、巻頭の灰燼は浪六張りで、寫生帖は寫生の妙を見ず、とくさした。「國家と個人」の小品が殊に氣障であるらしかつた。兎に角「自然と人生」の黒人受けは、熊次に地味な満足を與へた。經濟上にも、それはまた或ものであつた。初版二千部が三十圓を齎らした。これも向後一冊一錢五厘づつ熊次の手に入る事になつた。不如歸が二錢、自然と人生が一錢五厘、太兵衛さんの本家が所謂一字五厘のそれには遠くとも、熊次夫婦にとつては堅實な収入の見込がお蔭で立つた。熊次は此機會に、久しく思ふて居た事を斷行したいと思ふた。それは月給をやめ、原稿料生活をする事である。兄弟の仲でも、月給生活はやはり縛られる。如何に高級、高給でも、きまつた手當の使はれ人は、やはり自由がない。熊次が新聞社に出て居た頃、月末月給が渡る日の午後になれば、月給八十圓をとる社説記者も、十圓以下のそれも、ひとしく鼠紙の封筒片手に出現する會計主任加世田君の姿を待ち詫びて、忙しい者は兎に角、用もないものまでさり氣なく談笑して居残る容

子に、熊次は氣も重くなつた。他人事ではない、社長の弟といふ自分自身が即其一人であつたのだ。返子に住んで月給は送つてもらふ今の體でも、月給とりである限り、感情の上にはやはり自由がない。書いてばかりは居れず、書かねば社長に氣兼ねする。月給でなければ食へなかつた時代は兎に角、如何やら筆で飯が食へさうになつて來ては、矢も楯もたまつたものではなかつた。月給をよして、書くだけ報酬を受けやう。熊次は斯く思ふた。兄が來たある日曜に、熊次は兄と隱宅の庭を歩るきつつ勇を鼓して此事を言ひ出でた。待つて居た、と言ふやうに兄が後を引取つた。而して小説は一段一圓五十錢、雜文は一圓、一段に満たぬものも一段を以て算する事にしやう、と熟した栗のはじけるやうに兄は一氣に言つてのけて、事の案外早い落着にぽかんとした熊次を置いてきぼりにして、さつさと高臺の方へ上つて往つて了ふた。

明治二十二年五月の上京以來、明治三十三年九月の今日まで、K雜誌記者として七圓、新聞が出てから十一圓（十二圓と最初兄が言ふた。宇土君が熊次の相役佐々木君の十圓を多過ぎると九圓に減したので、熊次もお蔭で一圓減つた。宇土君を恨む事だ、と兄が晒つた。）最後三年は二十圓、十二年にわたる宛てがひ扶持の月給生活の後、熊次はやうやう自力で稼ぐ事をゆるさ

れた。熊次は身も軽くなつた。さうして「思出の記」に脂がのつた。  
明治三十三年のそれは、殊に爽やかな秋であつた。

## 第二十一章 蟹の足跡

最初一室、次に二室、後では時に表の中八疊まで借りて我家貌に住むだあらめ屋の四年間に、  
さまさまの人人が熊次駒子の客であつた。あけつ放しの家其ものが、熊次に全く人遠く住む事  
を容さなかつた。

氷川町の留守居にスイトンの正月をさせたお詫びに、岡野のおすやさんを招いたは、最初の年  
であつた。おすやさんは十日餘逗留して何くれと駒子の裁縫を手傳ふて往つた。熊次とおすや  
さんの間には、熊本の菊池隠宅で初めて會ふた時から感情の齟齬があつた。折角あらめ屋に招  
きながら、熊次が世辭ならぬ逗留日延の勸めに、おすやさんが頑として應じなかつた爲、危く  
熊次は爆發するところであつた。耶蘇教信者になつてから兎角つき合ひにくくなつた、といふ  
山鹿のおきな叔母が話も思ひ合はされた。然し父に捨てられ、夫に置いてきぼりを吃つたおす  
やさんが、男のいふ言を容易に聽かぬは無理ではなかつた。熊次は男であつたのである。

鎌倉から山越えて来たヘルメット帽に黒い髻の紳士の一行は、茶色の犬の背に一ぱひ山百合の花を負はせて居た。南洋通のSさんを熊次は其時初めて識つた。明治三十一年の人減らしに社員でなくなつた経済記者の若いY君は、社長が「ウッホン、ウッホンの間に行く男」と評した人であつた。正月の三日にあらめ屋に来て、駒子が出した饌に向ひ、雀が食べる程の飯をついで、箸をさし置いた。元日以来飲み通し、今日初めて飯を食ふと赤い顔して笑つた。

兄のうるさい來客は、大抵引張つてあらめ屋に來た。釜底の帽子片手に、路は歩かず緑の芝生を近道して莞爾々々兄の方へ寄つて來る今治時代の鶴城さんに肖た洋服の男は、毎日新聞のI君で、あらめ屋の熊次の室で洋服の膝を崩して、得意の漢詩を半紙に書き、「萬里封侯志未灰」と書いては本音を吐いちやつたと咲ひ、「老梅如人倚碧欄」と池上鏡泉の七絶を書き、「君の様なゴロツキ」と兄に云はれて、「ゴロツキはひどい」と抗議した丈の高い、眼のぎよろつとした、蒼い顔の眼鏡の人は號を霞山と呼ぶ記者であつた。父の共立學舎、兄の家塾の昔から、精練刻苦の文章家、岩一郎といふ其名の如く頑固な額つきをして、よく齒を剝き出して凧をすすする癖の井口君は、K新聞の創刊當時政治方面を擔當し、後大阪朝日に移り、支那に遊び、父に詩集

のみやげなど持つて來た。あらめ屋のしつかりした田舎普請、時代のついた天井や柱を見廻はし、

「お求めになつたんですか？」

と熊次に問ふた。借りて居る、と熊次は答へた。てれ隠しに兄が口をきはめて普請の堅牢ぶりをほめたものである。「井口の岩」と諺名さるる岩さんにも情事はあつた。氷川町時代、ある時兄の家に若い婦人が訪ねて來た。それは看護婦をして居る人で、井口君が夫婦約束をしながら果さぬ苦情を、先輩と聞く兄に持ち込んで來たのであつた。熊次は其後の事を知らぬ。然しずつと後で井口の妻と名のつて、隠宅で上手に琴を弾き、幼ない姪等へ愛想に「もしもし龜よ」を琴で弾いた婦人は、熊次が氷川町の座敷でちらと見た其人ではなかつた。

急用で俄に歸る兄に、約束で來る事になつて居る語學教師の若い英人の接待を命ぜられ、讀むは讀むでも滅多に英語を話す機會のない熊次は、困つた。時分ではあり、口封じに彼を養神亭に誘ふた。「樓臺明」の額をさして説明を求められ、熊次はぐつと詰まつた。聲聞きつけてか、庭傳ひに眼鏡の和服が小座敷をさし覗き、知邊と見えて「おな、Mr.——」と忽ちに握手した。

それは熊次も名を知る英語教師のHさんであつた。Hさんの郷里の家は熊本郊外にあつて、肥後の家と同じ村であつた。竹籤を背にしたHさんの家は、米國宣教師の家族が借りて居、上前の熊次はよく江見牧師夫妻や浦田君と其處のロングフェロウの會讀などに往つたものだ。Hさんの家は十年前に識つて、Hさんには今日初めて會ふた。羨ましい流暢自在な英語で、Hさんは熊次そちのけに主ふりをしてくれた。「都會で儲けて、田舎で使ふ」の、小犬を御膝に、巻蓆を召す車上の皇太子を拜したのと、Hさんの話は全くうまいものであつた。不圖氣がついたやうに、Hさんはやはり英語で熊次に問ふた。

「何故御兩親と一緒に住みなさらぬのです？」

「家が狭いから。」

と熊次は答へた。

Hさんの郷里の家と呼ばば答ふる近くに賑やかな絹織機の音を立てて居る大江の家の總領益雄は、東京は藏前の高等工業に居たが、國許の父との間面白くなく、ともすれば家を飛び出した。其ぶらつきの一つに返子に來た。駒子と同年の彼は、幼少時代犬に噛みつかれた左の眼の下の

疵を其まま、浮かぬ顔をあらめ屋に見せた。昔明治學院生時代に、自ら「露の舎主人」と號し、叔父の「石美人」に、「吉野の花を思はず君が筆に、石美人も點頭すべし」と手紙を寄越した彼は、今度は叔父の水彩スケッチを見せられて、「御器用だから」とほめ、何度位の角度で描くかと問ふた。少し科學數學の範圍に涉ると、頭が霧になる叔父は、ぼかんと甥の顔を眺めた。駒子が傍から註を入れた。眼分量で好い加減に畫く、と叔父は答へた。叔父が十五、甥が九歳の昔、他の甥の船津の太一郎などと三人面だけは正式にかぶつて、アカシヤのステッキで擊劍の眞似をすると、一番丈のひくい益雄は、毎々面を越して後頭部をステッキでうたれ、「あ痛」と叫んでくると廻はつたものである。

船津の甥の太一郎は、あらめ屋で午餐を振舞はれ、熊次が海老のライスカレエを七皿も換へるに眼をまるくして、「こらいさぎ！」と熊本言葉で驚いた。熊次は母肖で、美食の大食であつた。母は魚好き、鯛などは煮附で食ふた後を骨湯にして飲んだ。齒が無いくせに、柿や梨、林檎なども大根おろしでおろして食ふた。とても食はれたものではない甘つたるい豚のライスカレエをつくつたり、平常の餉臺にもきまつたものの外に一品二品何か添はねば満足しなかつた。少

年時代、腕力では毎每一歳下の太一郎に自由にされる熊次も、食ふ事に於ては叔父の位置を辱しめなかつた。熊次十四、太一郎十三の熊本時代、當時臺所を預つて居た深水の姉が兩少年の底無しぶりを氣にして、甘藷入りの團子汁を大茶碗に七杯と限つたものだ。初の三杯位は、味も分からず掻き込んだ。それからもう二十年近くなつて、まだライスカレエの七皿も換ゆる叔父を、流石剛の者の太一郎も驚いたのであつた。

不如歸が新聞に出はじめた年の暮に沼山のお濱さんは、熊次駒子に異つた客の一人であつた。禁酒會の會計などお濱さんはして居たが、お濱さんに會計を頼むと、勝手に流用して困る、と津森の叔母は母にこぼした。味淋位は料理に使はねば、と禁酒會の役員が駒子に云ふたものだ。お濱さんは此頃水彩寫生に凝つて居た。寫生靴をつるして、よく描きにあるくさうな。Kさんと雁行して白馬會の牛耳をとる他のKさんに繪を見てもらうて居た。朝夕の「朦朧とした景」が何とも云へず好いと云ふ。然し熊次が見せた伊香保の山の夕景色の朦朧を、お濱さんは根から問題にしなかつた。却て新聞に出した「大海の日の出」の文をほめた。熊次が出た後で、駒子はお濱さんから色色對良人業を授かつた。

「あなたのやうに、さう生眞面目になすつちやきりがありませんよ。」  
而してお濱さんは、ある新しい細君の實例を話した。

ある女學校出の細君が居た。夏など、主人が歸つて来る。餉臺に料理が並ぶ。主人が一寸見ていやな顔をする。細君決してはらはらせぬ。團扇をとつて、主人どころか自分自身を扇ぎ立て扇ぎ立て、(こうなんです、とお濱さんは仰山な團扇づかひの身振りをした。)

「召し上らないの？ おいや？ おいやならあなたおよし遊ばせ。おほほほほ。おほほほほ。」  
到頭主人もつり込まれて笑つて了ふ。

「そんな風にね。」

駒子は考へた。自分も昔は笑ふ事より外に何も知らなかつた。然し結婚五年の生活は、駒子を自由に笑へなくしてしまふた。まづい料理が出来ても、平氣でそんなに笑へたら嘸よからう。然し熊次の機嫌は測られぬ。此方が笑ふと、よく怒られるのは毎毎の事である。調子が狂ひがちの夫婦に、お濱さんの忠告は的をはずれた。

失戀者が戀ひられる。「泣かぬ燈」の白石おしんさんが、銀のピンをみやげに持つて相談に來た。

女子學院を卒業後、おしんさんは江の嶋近いさる町の小學校に教師をして居た。ある折の親睦會に、「西洋の都々逸」といふて英語の讚美歌を歌ひ、物議を醸した事が、隱宅の苦笑ひ話になつたものである。町に耶蘇信者の醫者がある。看護婦上りの細君は、今以て「先生」と良人を呼ぶ。夫婦共津森叔母の信者である。叔母は小豆飯が好きであつた。「わたしが高野さん宅に往くと、直ぐお勝手にさくさくといふ音がする。」と叔母は曰ふた。おしんさんの奉職も、高野さんの世話であつた。高野さんに代診が居た。佐久間さんは若いが腕はしつかりして居て、子供の病氣などの見立ては先生より上手と云はれて居る。佐久間さんがおしんさんに打込んだ。前期は通つたが後期の試験に落ちた佐久間さんは、おしんさんの前で男泣きに泣いた。「あなたに合はず顔がない。佐久間さんの戀は結婚を意味する眞劍なものであつた。何と返事をしたものであらう？」諸否の決をする前に、おしんさんは相談に來たのであつた。熊次駒子の無條件賛成を得て、おしんさんは力強く歸つて往つた。

ある日、隱宅の玄關に茶色の外套を着た疲れた顔の紳士が立つた。それは獨逸から歸つて來たばかりのO博士であつた。熊次の前期の同志社記憶に、Oさんは寶玉の輝きを彼が幼ない頭腦

にとどめた人であつた。左の高頬にほぐろを見せて血色の好い美青年、服装などもきちんとして、碓氷先生の姉刀自の葬儀に袴をはいて凜としたOさんの姿は今も眼にある。それは牛若丸を熊次に思はせた。齡と身丈に逆比例していつも首席の年少秀才が英語演説などする折は、女學校の生徒がつくじり合ふて騒いだものである。同志社切つての秀才は、大學豫備門の入學試験に試験官に舌を捲かせた噂を十八の熊次は熊本に居て當然に聞いた。二度目の同志社—熊本といふ筋道を通つて四年目に熊次が東京に來た時、毎期文科大学の特待生をつづけて居たOさんは、靈南阪の基督教會に日曜學校の詩篇を受持つて、熊次の母などが講義を樂にして聞いたものである。二十二の熊次を、大きくなりましたね、とOさんは言ふた。學問にかけては先輩も假借せぬ新學士は、官學に志を得ず、早稻田に聘せられて其處に信望を博した。哲學者のOさんは、また詩人Oさんであつた。「和歌に宗教無し」からはじめ、折々雜誌に出るOさんの文を、熊次は愛誦したものである。「哲學者と詩人と預言者は、宇宙を家とする三人の兄弟なり。」とOさんは書いた。「悲哀の快感」を書いては、「人は悲哀に訓練せられて眞正の樂境に達するを得、これまことに悲しき人生の事實なるべし、然れども其事實なるを如何せんや。」と嘆いた。



同志社在學時代からOさんは和歌を詠んだ。早稻田の哲學教授の歌には「何處より通ふ光ぞあめつちをてらす月日の美しきかな。」といふのが傳へられた。K誌にはOさんの譯したキングスレーの「三人の海士」が出たり、探蓮の新體詩が出たりした。「烏も群れて埒にゆくに、月は一人で淋しそな——いつかいつかと待たれし今日の、そぞろあるきの此夕。」の俗謠も、新婚當時のOさんをつくつたものである。友山君の細君は、Oさんの新妻の友であつた。友山君はO夫人に公開狀を書いて、Oさんの氣焔が近年おだれた、と夫人の誠吹を要望したものである。Oさんは尙も歐羅巴に研學に往つた。而して神經衰弱で歸朝し、靜養の地を湘南に求めて突然老龍庵の玄關に立つたのであつた。養神亭に二三日居て、此處も騒しいからとOさんは去つた。駒子は熊次が養神亭にOさんを訪ねもせぬを不思議に思ふた。平生Oさんをほめちぎつて居る熊次の此舉動は、彼女に不可解であつた。智識といふ智識、學問といふ學問に特別尊敬をもつ彼女であつた。お茶の水時代、もと同志社出身で今は帝大の教授であつた心理學專攻のM博士を保證人になつてもらつた時、「今度の保證人の御方は、名高き學者にて、まことに嬉しく」と國許の父母に書き送つたものである。彼女は良人が益を得べき機會を見す見す逸してしまふ事

を物足らず思ふた。老龍庵の玄關の挨拶を永別に、Oさんは程なく郷里に逝いた。三十七歳、大成はこれからといふ齡であつた。頭腦だけでも残して往つてくれればと、M博士門下のM學士が嘆いたさうである。

二度目の同志社時代、熊次の同級、いづれも十八九、二十歳どまりの中に小父さん株の年長が二人居た。一人は上州出の世馴れたIさん。一人は越後生れのKさん。東京は飯田町のこれも同級片貝君の下宿で三年ぶりで會ふと、IさんはK誌に熊次が何欄を擔當して居るかを問ふた。「時事ですか？」否、雜録、と聞いてIさんは笑止な笑顏をした。Kさんには十年も會はなかつた。同志社の十傑投票に「思想家」に當選したKさんは、紋付の木綿羽織を五年間着通した人である。識見文章夙に一家を成して居て、親睦會の餘興には擬せらるる坊さんの眞似など碎けてしたものだ。熊次はKさんを推重して居た。Kさんの姉者人のおひろさんは、江見牧師の家の臺所も賄へば、子守もした。京都を飛び出し熊本で江見家に置いてもらつた時、おひろさんをKさんの姉者と聞いた熊次は、矢部さんと呼んで決して名を云はなかつた。江見さん夫妻は「ひろや」と呼び、鎮雄坊は「ノルシイ」と呼ぶ。おひろさんが何と云ふても、熊次は矢部さん

と云ふた。弟のKさん故であつた。十年會はぬKさんが、ある夏突然あらめ屋に現はれた。Kさんは同志社卒業後江見さん東上後の熊本英學校を擔當して居たが、近頃は安中の教會に牧師をして居る。深水の義兄を訪ふたついでに、昔の同窓を音づれたのであつた。昔にかはらぬ下齒を透かす越後訛りで、同志社で熊次が殊に親しくして居た片貝君の消息を、Kさんは告ぐるのであつた。Kさんの話で熊次は初めて片貝君の死を知つた。肺病になり、大森で鶏を飼ふたりして居たさうな。同志社時代女房のやうに自由に熊次が扱ふて居た片貝君が、卒業上京後はめきめき賣り出して鼻息が荒くなると、二人の間は疎くなつた。東京からまた京都に戻つて同志社の雑誌を擔當して居た片貝君に、「グラッドストーン傳」の紹介を頼むと、「多年の勉強はますます著者をして巧妙ならしむるを見る。」と書いた。それ以來熊次ははたと心の扉を片貝君に閉じた。熊次の結婚に得意の和歌など詠んでくれたが、一言の禮も云はなかつた。而して其死をすら今始めて知つたのである。知れば流石に濟まなかつた。後で故人に親しかつた同級生の一人が輕井澤から手紙をよこし、片貝君の歌集を出したいが五百部何程で出來やうかとの照會に、熊次は社の田部君に問ふて要領を答へた。然し進んで盡力しやうとも云はなかつた。歌集

の成行は知らぬ。企畫者其人も死んだ事をすつと後で聞いた。

不如歸が出た後、其紹介をのせた「新聲」といふ青年雑誌が送つて來たが、夏も關のある日、其新聲社の主といふ三十前後の人があらめ屋に訪ねて來た。東北辯の、蒼白い、着流し姿の人であつた。新聲の秋の附録に短篇小説を書いてくれ、と謂ふのである。一考して、熊次は承諾した。時分で、養神亭から料理をとつて午餐を出した。魚がふるかつたか、客人は大部分を残した。一箸宛口へ持つて往つては、すつと啜り込むやうな音を立てての飯食ひ振りが、著しく耳についた。其後上方へ往つたさうで、山科停車場で不如歸の一場面を憶ひ出した、不如歸は一代の傑作とは思はぬが、眞に佳作と思ふ、とS君は手紙をよこした。新着の「新聲」には、「肥後熊次、湘南に寓し、日夕富嶽に對して筆をとる、果然不如歸は行燈部屋の産物にあらざりき。」と書いてあつた。其内返信料前納で小説の題名を問ふて來た。「零落」と熊次は答へた。氷川町時代落ちぶれて來て五十錢熊次からもらふて往つた昔の兄の塾生を種に、餘は空想の短かいものを書き送つた。熊次が社外のものを書いた最初である。それが掲載された秋期附録の一冊が送つて來た。それにも不如歸の取沙汰が二三ヶ處に書いてあつて、赤インクで注目の丸

がつけてある。それがお禮のつもりらしく、何時まで待つても稿料は送つて来なかつた。尤も最初から稿料の話はてんでしなかつたが、無報酬で書かざるつもりはなかつたので、熊次は不快であつた。然し打出して催促する勇氣がなかつた。後で、其S君が喰へぬと熊次の事をいふた噂を熊次は何かで讀んだ。あの養神亭の腐れ魚の料理では、成程「喰へぬ」筈であつた。

兄が六尺近い色黒の八字髻、鶴の毛羽織の人を連れて來た。郷里葦北の小學教師I君は、岩城叔父の和歌の弟子であつた。高い山があれば、それ相應に噴井の水はのぼるの、新聞社にはパスがある筈のと、何でも知つて居る教師は、生徒に言ふ如く上背七寸の高みから肥後兄弟の頭上に智識をふりまいた。初対面にはきまつて黙る熊次は勿論、話すが好きの兄すら口を出す隙がなかつた。歌の話をして、「岩城先生位の歌人は、日本にもさう澤山ありますまい。」まではよかつた。お世辭のない客人は、不如歸の不の字を言ふかはりに、滔々と小説汎論をはじめ、矢張馬琴の小説が一番好いといふ結論に到達した。熊次は流石に少し情氣る、兄がほウツと觀念の七を投げたものである。

砂の上のこる蟹の足跡、あらめ屋四年間の夫婦が住居に客となつて印象を残した人のさまざ

ま、其一つだに捨て難いなつかしい思出である。

## 第二十二章 都へ

一

「東京へ出なけりやならん體だけん。」

母の一言が實現さるる機會は速に來た。

「土臺から据ゑ直しなはり。」と四年前に母が言ふた。海邊生活の四年で、體は十分に鹽をした。經濟の基礎も、兎に角据わつた。兄の所謂「進水式」も濟んだ。返子ももう澤山である。去年あたりから要砦令で、返子界限は其筋の許可がなければうっかり寫生も出來ぬ。葉山の方で、濱の麥畑の家を寫生して居たら、通りかかりの百姓ともつかぬ男が、「イリヤマズ」の何とかへ見せてやるから其畫をくれる、と云ひ募り、此は畫である、圖ではない、と何と言ふても聽かなかつた。別荘は續々出來る。濱は狭くなる。もう返子も澤山である。あらめ屋は居易い家で

あるが、駒子も借間生活にはもう鑿き鑿きして居る。

「東京へ出やうぢやないか。」

夫妻は、何時となく斯く言ひ合ふた。

避暑の客はとくに引あげてしまつた。此兩三年往つたり來たり好いお隣であつた山野のお爺さんも、いよいよ東京でお婆さんと同棲するさうで、あらめ屋を引揚げて往つたは月の始であつた。養神亭のはなれに居た藤原君夫妻も、再起の策が成つたか、とくに返子を引揚げて東京は赤坂新坂の附近に家を借りたさうである。伊倉の敦雄君は遠く米國へまでも往つた。「お家歸らう！」とわめいて居た夏の子供の聲も耳について居る。以前は、父母の在す處を「わが家」と思ふた。然し今はお家は父母の住む此返子櫻山ではなささうな。

東京だ。やはり東京だ。

「東京へ歸らう！」

夫妻は斯く言ひ合ふた。

父も母も覺期の上であつた。兄も異存はなかつた。九月末に、夫妻は浴衣姿のまま家を見に

出京した。兄の住む青山南町のあたりから、高樹町界隈を探して歩いた。木立涼しい邸内のはなれ家は、非役軍人の有で、座敷には大きな支那十八省の地圖をかけ、支那研究書類が堆く几上に積むであつた。「旦那様は何方へお勤めでございますか？」と四十近い奥さんが駒子に問ふた。「新聞社」と聞いて、奥さんはにやり蔑み笑ひをした。次に見た家は恰好だつたが、ほとりに元結工場があつて、がらがらとやかましかつた。赤十字病院の近くにあつた家は、庭は氣に入つたが、書生部屋に思ひがけない獨立便所が建てこめてあつたりして、いやな氣もちでやめた。得る所なく一夜泊つて、あくる日兄の家の書生に頼んで、今度は青山の北裏を見てもらつた。権田原に一軒、原宿に一軒あるといふ事で、熊次夫妻は先づ原宿のから見に往つた。青山六丁目善光寺裏原宿の角屋敷で、あたり静かなのも好ましい門構へ、立關附の家は古いが室敷もあつて、庭には可なりな赤松の枝をひろげた一株もあつた。家賃が敷金二十圓、月十四圓は少し手重だが、出京する程ならこれ位の家には住みたかつた。夫妻は直ぐそれにきめた。而して掃除の事は本宅に頼み、夫妻は急ぎ返子に歸つた。

一一

大きい荷物は、來た時同様舟便に托し、必要な手廻はり、寢具、炊具だけ手荷物にして持つて行く事にした。來時に懲りて、卓は船送りにした。返子生活四年間に描いた夥しい水彩スケッチの大部分は、裂いて捨てたり、子供のおもちやにやつたりした。拾ひ溜めた貝を、一個づつ、一枚づつ、駒子は丁寧に綿にくるんで、箆筒につめた。不用の道具類のあるものは隠宅に、あるものはあらめ屋に置土産にした。近所の顔馴染にも、それぞれ暇乞をした。其間にも、熊次は日日「思出の記」を書いた。

「思出の記」が新聞の上で三の巻、主人公の郷里出奔の條に達した頃、熊次駒子が返子を去る日が來た。

住めば永久のやうに、動けば此處も假の宿であつた。四年も住んだあらめ屋と其人人を後に、富士と相模の海に告別して、夫妻は返子驛に往つた。四年前の都落ちは、二人ぎりの淋しい事

であつたが、今日の都歸りは、後が淋しくなるので、送りがてら出京する父や母や其女中等も一同に、賑やかな出立であつた。「左様なら、御機嫌よろしう！」と挨拶する車夫の久さん勝さんの聲もしんみりと、發車際まで歩廊に立つて見送る家主太兵衛さんの圓らな兩眼に涙があつた。

明治三十三年十月四日の朝である。

小説 富士 第二卷 終

第三卷 續刊

大正十五年二月八日印刷  
大正十五年二月十一日發行

小説 富士 第二卷 並製  
定價 貳圓

版權所有

著者	東京府北多摩郡千歲村粕谷
著者	徳富健次郎
著者	徳富愛次郎
發行者	東京市京橋區南金六町九番地
發行者	福永一良
印刷者	東京市京橋區堀山町五番地
印刷者	渡邊吉郎

版元

東京・銀座・新橋  
福永書店

電話 銀座 東京 四六六九番  
電話 銀座 東京 四六六九番

大正十四年五月出版

小説 富士 第一卷

徳徳 富富 健愛 次郎 著

いと小さき夫妻が結婚生活史、やがてまた

新世界の創造史。第一巻は明治二十七年か

ら明治二十九年にわたる。

第三十八版

製並	製特
四六判九ボイ 月光色リネ 定價貳圓	四六判九ボイ 日光色鹽瀬 定價五圓
・送料廿錢	・送料廿六錢
組六頁	組六頁
箱入	箱入

東京 銀座 永福書店 振替 東京 四〇四六六

大正十二年四月出版

# 竹崎順子

四六判・九百頁・折革式天金箱入  
濃茶編琥珀表紙・三枚短冊石版七度刷  
肥後略圖石版壹葉・日記拔萃二色版  
凸版各一葉・特撮寫真版十三葉  
定價四圓五十錢  
送料書留廿七錢

徳富健次郎 述

山に阿蘇、海に不知火、永劫に燃ゆる火の國肥後に、擇まれた「女」の家がある。矢嶋と云ふ家である。主婦の鶴子は、百年前の新しい女であつた。鶴子の腹から男の子二人、女の子七人生れた。七人女は鶴子の七變化である。七人七様の異つた生涯を渡つて、女の種種相を見せた。「女」の完成の爲にさまざまの努力された貢献である。中に就て、堅實な父と潑刺とした母との尤もよく調和された體現が、七人女の三番目、竹崎順子である。九十九年前肥後の片山里に生れ、日露戦争當時八十一歳で世を去る時、自傳の起稿を甥なる著者に托した。十八年目に著者は其遺托を果して此書を成した。小説富士を讀むにも、缺ぐ能はざる参考の一書である。

東 京 振 替 店 書 永 福 京 座 銀  
四〇四六六

大正七年四月出版

# 新 春

第六十六版

三六判四百六十頁  
綠金裝羽二重表紙  
定價二圓三十錢  
送料一圓  
著者スケッチ色刷二葉  
特撮寫真版五葉

徳富健次郎 著

龍舌蘭は六十年で花が咲く。著者は人生五十年にしてやつと「新春」に到達した。それ程彼が負荷は重く、束縛は強く、苦闘は長かつた。彼が「新春」の歡喜の深大なる所以である。本來の面目、赤裸の自然に復へつた一のアダムが一のイヴと天人の前に啼れて一になる時、其處に新天地が開かれる。醒めたる一對の増すに従つて世界的イルミネーションは次第に點火される。爆裂彈にあらず、砲銃火にあらず、一切の強制を須ひぬ眞の革新は、其處から生れねばならぬ。「過去」の抑壓に苦しめられ進出の路を容易に看出し得ぬもどかしさに焦躁し或は自棄する青年男女に向つて、老少の下壓上壓の中間には生まれ苦しまぎれの冷笑若くは妥協に遁るゝ中年男女に向つて、若い生命の上壓を苦しみ妬む老年男女に向つて、「新春」は胸を開いて語る。彼は已に六萬五千人に語つた。彼は更に一人もヨリ多くの人に語りた。何故なれば、「我は復活也、生命也、我を信する者は死ぬるとも生くべし」と著者の身を假つて宣するは即ち自然の聲で、自然は一切を愛するからである。

東 京 振 替 店 書 永 福 京 座 銀  
四〇四六六



大正三年十二月出版

# 小説 黒い眼と茶色の目

三六判洋布装天金箱入  
定價二圓三錢  
送料書留二十錢  
第三十一版

徳富健次郎 著

身邊を包む五色幕を切つて落して、青天白日赤裸に立現はれた著者青春の自畫像はこれである。十九、二十歳の著者は斯く生き斯く戀した。其戀はかりそめの戯れかのやうに起つて著者の一生に甚大に影響し、著者を驅つて人生の裏小路に追ひ込むだ程深刻に、譬へば氷山の水面に顯はるるはさもなくして眼に見えぬ水中は恐ろしく根深いにも比す可きものであつた。本書は其告白である。

小説富士に對して、小説「黒い眼と茶色の目」は、楔子又序曲である。

東 銀 座 福 永 書 店 振 替 東 京 四 〇 四 六 六 京

大正二年三月出版

# みみずのたはこと

四六判七百〇六頁箱入  
濃茶綿琥珀裝天  
挿畫寫眞版  
定價三圓五錢  
送料書留二十四錢  
第百一十二版

徳富健次郎 著

「みみずのたはこと」は、著者が齡四十にして初めてしかと大地に脚を立てた最初の生活記録である。大正二年の出版で、年を経る十二、版を重ねる百十二、十萬餘部を出して、いまだに凜々と生きて居る。それは土に注がれた愛のしたゝりで、土は所謂地久、而して「愛は何時までも墮つる事がない」からであらう。前版は縮刷六號であつたが、復活版は最初に復へつて四六型五號とし、挿畫を新にし、卷末に著者の最近消息を報ずる一長文を添へた。「みみずのたはこと」に著者のつく奥印である。

東 銀 座 福 永 書 店 振 替 東 京 四 〇 四 六 六 京

明治三十四年十二月出版

# ゴルドン將軍傳

改版近刊

著 郎 次 健 富 德

主人公は著者の好きな男の一人、楽しんで書いた傳記の一つである。打算的の英吉利に、飛びはなれた東洋的色彩を帯びた快男兒の面目は、潑刺として眼前に跳る。

\* \* \*  
\* \* \*

東 座 銀 店 書 社 醒 警 東 座 銀 三 五 五

明治三十六年二月出版

# 小説 黒 潮

四六判三百九十頁  
佛蘭西式紙裝釘  
定價一圓五十錢  
送料書留  
第三十四版

著 郎 次 健 富 德

日露戦争前に著者は此小説を書いた。日露戦争終るやがて一度、大正二年の夏に向一度、著者は其續稿、若くは准續稿を書きかけて止めた。中心がよくつかめなかつたからだ。中心がつかめて、小説「富士」が初めて書かれた。地質學者の言によれば、富士の裾の愛鷹山は、富士よりふるい噴起であつた。愛鷹も美しい山である。

\* \* \*  
\* \* \*

東 座 銀 店 書 社 醒 警 東 座 銀 三 五 五

明治三十九年十二月出版

# 順禮紀行

菊半裁判四百八十頁  
定價一圓八十錢  
送料書留十八錢  
第二十一版

德富健次郎著

露西亞に闘ひ勝つて然も衷心勝利の悲哀を感じた純眞な日本の靈魂は、身を順禮に委しつゝ、遠くパレスチナに耶蘇の足跡を尋ね、喧嘩相手の露西亞其ものにすらトルストイを訪ねた。ヨリ大なる日本を生まんが爲である。其意味に於て、一卷袖珍の順禮紀行は、新日本文學に於て永劫に輝やく寶玉の一である。

\* \* \*

東銀 東座 警醒社書店 東五 振三

明治四十二年十二月出版

# 寄生木

四六判一千百餘頁  
總洋裝美本  
定價三圓五十七錢  
送料書留廿七錢  
第六十五版

德富健次郎著

乃木神社が建ち、人として愛し苦しんだ乃木さん夫妻は、神にまで祀られる。献げらるゝ供物は多い。然し乃木さんに愛され、乃木の寄生木となつた青年士官小笠原善平の『寄生木』程貴重なものはない。日露戦争に戦死した乃木二令息に後るゝ四年、乃木大將夫妻の自刃に先立つ四年、彼は情義の八重がらみに身一つを扱ひかね、故郷岩手で短銃自殺を遂げた。彼は死んだ。然し死ぬ前に『寄生木』を書き遺した。多情多恨の彼が二十年の生命を打込んだ留魂録『寄生木』、それを遺囑によつて著者が永久に活かしたものが『小説寄生木』である。

東銀 東座 警醒社書店 東五 振三

大正十三年九月出版

# 太平洋を中にして

四六判三百三十八頁  
定價一圓五十八錢  
送料書留十五錢  
第六版

德富健次郎編

太平洋を中にして、日米の在らん限り、日米問題は根本的に解決を要する。それについて提出された答案は無數。然し編者の所論のやうに徹底的なものは斷じてない。それは人情自然の立場から下された永久性の斷案である。内治も國交も人情が支配し、自然が裁く今日、「太平洋を中にして」を差措いて、日米問題は言はれない。

\* \* \*  
\* \* \*

東京 東銀 會究研活生化文 東京 東座 一五五一五

538  
155

終

